リサーレイーヌール全集より

誉れあるラマダン（断食月）について

著者:

ベディウッザマンーサイーディーヌルスィー

YENİ ASYA
NEŞRİYAT

Proofreading:
Yeni Asya English Team
Translated and published:
YUHİB

Address:
Gülbahar Caddesi, 1508 Sokak, No: 3,
34212 Güneşli, Istanbul
Tel : +90 212 655 88 60 (Pbx) Fax : +90
212 651 92 09
e-mail: risaleinur@yeniasya.com.tr
nesriyat@yeniasya.com.tr

Contact Address:
Yeni Asya Eğitim Kültür ve Araştırma
Vakfı Cemal Yener Tosyalı Cad. No: 61,
Vefa, Süleymaniye - Fatih, Istanbul
Tel : +90 212 5131110
e-mail: iletisim@yav.org.tr
yuhib@yeniasya.com.tr

This publication is sponsored by YUHİB.

著者ベディウッザマン・サイーディ・ヌルスィー（Bediuzzaman Said-i Nursi）について、そして、著書リサーレイ・ヌール (Risale-i Nur) とは

ベディウッザマン・サイーディ・ヌルスィーは1877年にトルコ東部で生まれ、アッラーに献身的に仕えイスラームを人々に正しく伝えるため自己犠牲を貫き、1960年に87歳で生涯を全うした。彼はイスラーム宗教学に加えてすべての伝統的な宗教科学、また現代科学も独学で学んだ。彼の卓越した能力を示す事柄として、13才のころ10年以上かけて学ぶ知識を3か月で学び、その上暗記し理解したことから、その当時の宗教学者たちからベディウッザマン『時代の脅威』という敬称を与えられたことが挙げられる。

ベディウッザマンの生涯は、カリフ制を継承していたオスマン帝国の最後の数十年、第一次世界大戦後の帝国の崩壊と分断の時期に重なっている。 1923年に建国されたトルコ共和国の最初の37年間は、政府の抑圧的な反イスラムおよび反宗教政策で政府の方針に従わない宗教学者は厳しい弾圧を受けた。もちろん、彼もその一人であり、最も過酷な弾圧を受けたと言っても過言ではない。

第一次世界大戦後の数年間は、イスタンブールでのベディウッザマンのイスラム教への攻撃に対する闘争は活発であり、宗教府の高等公務員であった時期でもある。彼は多くの学生を育て、イスラム世界の主要な学者たちと討論や議論を行い、執筆にもいそしんだ。第一次世界大戦勃発後に捕虜として捕まるまでほぼ2年間、トルコ東部に侵入したロシア軍に対して有志による連隊の隊長として戦った。当時、彼は積極的に公に従事することによってイスラム教の利益を促進することを追求していたと言えるだろう。

しかし、帝国から共和国への移行をみた年は、ベディウッザマン自身にとっても変化の年となった。彼が上記の公的生活から個人的な勉強、祈りに集中する生活に一旦入っていたが政府により強制的に終止符をうつことになる。約2年後の1925年から25年間、居場所を政府からの命令によって転々とする。その間、投獄、当局による迫害を受け続ける。しかし、これらの年月はリサーレイ・ヌールの執筆の機会となり、投獄や軟禁状態で居場所を転々とすることでトルコ中にその名が知れ渡り、読者、支援者が増え、出版が禁止されたため手書きで普及されるという前代未聞の事態となる。ベディウッザマン自身の言葉を引用すると、「今私の人生のほとんどが、自分の自由意志、能力、理解力、洞察力を超えて、聖クルアーンが基盤となるこれらの論文を生み出すための方向に別の意思が働いていたことがはっきりと

わかる。」「それはまるで、一学者としての私の人生のすべてが、聖クルアーンの奇跡を示すためこれらの著作の準備に費やされたかのようだ。」と語っている。

ベディウッザマンは、イスラム世界の衰退の本質的な原因がイーマーン（信念）の弱体化であると理解していた。この弱体化と、19世紀および20世紀の科学と進歩の名の下に唯物論者、無神論者などによって実行された人類史上例のない宗教への攻撃により、彼は人々を啓蒙することが緊急かつ最優先であると判断していた。

ベディウッザマンは、信仰の基本的信条の一つである聖クルアーンの真実を説明および証明する14巻からなるリサーレイ・ヌールを23年の月日をかけ執筆した。彼の手法は、信仰と不信仰の両方を分析し、聖クルアーンに従うことによって、アッラーの存在や団結などの信仰に必要なのすべての真理を、明確な根拠のある議論を通じて実証することであった。預言や来世での復活だけでなく、クルアーンの真理が全ての存在と宇宙に関する唯一の合理的な説明であることも証明している。

リサーレイ・ヌールは、全ての人に理解しやすい物語、比較、説明の形式で進められている。一連のカテゴリ毎にされた証明は、宗教の真実が現代科学の発見と両立しないのではなく、それらの発見の唯物論的解釈が不合理で不条理であることを示している。実際、ベディウッザマンはリサーレイ・ヌールで、全宇宙に関する現代科学の息をのむような発見が、聖クルアーンの真実を裏付け、強固にすることを証明した。

リサーレイ・ヌールは、トルコでの非常に長く暗い歴史の中でイスラム教の信仰を維持し、活性化することにおいて大きな役割を果たした。これにとどまらず、リサーレイ・ヌールは、すべてのイスラム教徒だけでなく、すべての人類に共通している問題を論じており、現代の人類が抱える問題を解決する道を示している。それはイスラム教徒であるか否かに関わらず、現在の人間の精神性や深く根差した普遍性に従って書かれている。結果的に、現代人が直面するあらゆる質問、疑問、混乱にも答える結果となっている。

また、リサーレイ・ヌールは、以前は一部の研究者のみが詳細に研究していた最も理解することが困難な問題についても、誰もが理解出来るように説明している。よって、読者がある問題に全くの無知であったとしても、混乱せず理解するように段階的に説明されている。

さらに深遠な問題、人と宇宙の真の本質と目的を説明する際に、リサーレイ・ヌールは、真の幸福は、この世界と来世の両方において、アッラーへの信念と彼の知識にのみ見出されることを示している。それはまた、不信仰が人間の精神と良心にもたらす悲惨な痛みと不幸を同時に指摘する。なぜなら不信仰を選択することは、破滅と逃避を実行するための誤った試みであり、誤りに気付くことで、どんな思想を持つ人もイマーンに避難することが可能であると主張する。

つまり、聖クルアーンは単に人間の知性だけでなく、それ以外の内的能力にも関与している。だからこそ、宇宙とその機能を創造としての本当の性質と目的を学ぶことや、その単一の創造者の属性と、彼自身への義務を学ぶように人間に指示するのだ。これは、ベディウッザマンがリサーレイ・ヌールで採用した方法と共通している。

この方法に従うことで、唯物主義、自然主義、無神論、または科学的進歩への物質主義的アプローチに隠された宗教への攻撃に対しても明確な答えを有することになり、結果、揺るぎない真のイーマーンが得られる。すべての科学的および技術的な進歩は、宇宙の仕組みを明らかにすることである。宇宙が無限大で複雑で意味のある統一された一冊の本であり、単一の著者を説明していると見なす場合これらすべての発見と進歩は信仰を強め、さらに深め、高めるきっかけとなる。

人間に最も根源的に必要なものは、宗教、すべての最も美しい名前と属性を持つ全能のアッラーを認識して崇拝すること、そして彼の法律に従うことである。宇宙に現れたものと彼の預言者を通して明らかにされた聖クルアーンのメッセージ、全知全能のアッラーの最終啓示書は彼の最後の預言者ムハンマド（彼に平安と祝福がありますように）によって完全に説明され、イスラームは人類のため完結した。

ベディウッザマンはリサーレイ・ヌールで科学と宗教の間に不一致がないことを明確にした。むしろ、人類の真の進歩と幸福は、科学と宗教の両立、即ち聖クルアーンの説く道で達成できることを証明したのだ。

*訳者: *TI @Feb2025*

リサーレイーヌール全集より

著者: ベディウッザマンーサイーディーヌルスィー

29通目の手紙　二部二節

誉れあるラマダン（断食月）について

一部の最後にイスラムを象徴する崇拝行為について少し触れたが、その中で最も光り輝く素晴らしい、誉れあるラマダン月の断食について、この二節でその真理を解き明かす。

この二節は、誉れあるラマダン月の数多くの真理の内、九つの真理を説く九つの講話による。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ

شَهْرُ رَمَضَانَ الَّذِىٓ اُنْزِلَ فِيهِ الْقُرْاٰنُ هُدًى لِلنَّاسِ وَبَيِّنَاتٍ مِنَ الْهُدٰى وَالْفُرْقَانِ

【慈愛あまねく、慈悲深いアッラーの御名において。ラマダン月は、人々の導きとして、またみちびきの明白な証と規範としてクルアンが下された月。（アルバカラ章 2:185）】

第一の講話

誉れあるラマダン月の断食はイスラムの五つの義務のうち、最も重要なもののひとつである。また、イスラムを象徴する崇拝行為においても最も肝心なものである。

誉れあるラマダン月の断食には多くの真理がある。その存在が唯一無二であり名誉と栄光の主の絶対的支配という点において、人間

の社会的営みという点において、個人的な営みという点において、自我の成長という点において、アッラーの恩恵に感謝するという点において、それぞれ真理を有する。

アッラーの絶対的支配という点において、ラマダン月の断食が内包する数多くの真理のうちの一つは以下の通りである。

アッラーが、地上をめぐみの食卓とし、すべてのめぐみをその食卓にて مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ【思いもよらないところから糧をもたらす（アッタラーク章部分65：3）】とあるように、このめぐみによりアッラーの完璧な養育、慈愛、慈悲が体現されている。ところが、人間という存在は、よく道を踏み外し、見せかけの原因に惑わされ、その状況が意図する真理を見抜くことができず、見抜いたとしてもそれすら忘れる。

誉れあるラマダン月に、信仰する人々は一瞬にして秩序ある軍隊さながらの様をなす。その支配と治世にはじまりも終わりもない君主の宴に招待されたかのように「さあ、召し上がれ」との許可を夜が近づくまで待ち、しもべとして相応しい態度で、かの御方の慈悲深さ、壮大さ、すべてを包括する慈愛に対し、気高く秩序ある崇拝で応える。このような気高き崇拝や名誉ある任務に参じない人間は、果たして人間という名に相応しい存在であろうか。

第二の講話

アッラーの恩恵への感謝という点において、ラマダン月の断食が内包する多くの真理のうちの一つは以下の通りである。

『第一の言葉』（リサーレイ・ヌール全集　『言葉の書』内）でもあるように、ある君主の厨房から運ばれた食事は代価を要求する。食事を運

ぶ者にはチップをはずみ、非常に価値のある恵み（食材）や、それを提供した存在を認識しないことは、きわめて愚かである。同様に、アッラーが人類のため、際限のない多種多様な恩恵を地上に根付かせ、それに対する代価として、感謝を要求する。その恩恵の原因やその持ち主などは、それを運ぶ存在に過ぎない。しかし、それらを運ぶ存在には代価を支払い、ありがたがる。それに値する以上の敬意や謝意をしめすことさえあり得る。実に、真の恩恵の主は、その恩恵のあらゆる原因よりも感謝するに相応しい。かれに感謝するということは、その恩恵がかれのもとから直におくられていることを知り、その恩恵の価値を評価し、その恩恵を自身が必要としていることを認識することにある。

これらを踏まえると、誉れあるラマダン月における断食は、真に清らかな、大集団での感謝の鍵であることが分かる。なぜなら、ラマダン以外の断食が義務ではない時、大抵の人間は真の空腹を感じず、多くの恩恵の価値を意識することがない。一切れの乾いたパンの価値は、満腹の人間には、裕福であればなおさらのこと、意識しがたい。実に、信仰する者にとっては、断食後の一切れの乾いたパンが、偉大なるアッラーからの非常に価値のある恩恵であり、それを味わう器官自身が証言するのだ。誉れあるラマダン月に、一国の王から最も貧しい者にいたるまであらゆる状況にある人間が、恩恵の価値を意識することで、魂の感謝に到達することが可能となる。

また、日中の食事が禁止されていることで、「この恩恵はわたしのものではありません。これらを飲食することについて自由ではありません。つまり他者の財産であり恩恵です。かれの許可を待ちます。」と、恩恵を恩恵であると知り、魂が感謝するのだ。

このように、断食は多方面から、人間の真の任務である感謝への鍵となる。

第三の講話

人間の社会的営みという点において、ラマダン月の断食が内包する多くの真理のうちの一つは以下の通りである。

人間は、生きていくための糧という点で、多種多様な状態で生かされている。創造主は、その不協和に対し、裕福な者が貧しい者を助けることを招待している。というのも、断食により、裕福な者も貧しい者の同情すべき哀れな状態や空腹をようやく感じることができる。もし断食がなかったならば、自分本位で利己的な裕福な者にとって、空腹や貧困がどれほど過酷で、彼らがどれほど援助を必要としているかを理解することは困難となる。この側面から、人類が同じ種に対し同情することは、真の感謝への基盤の一つであることが導かれる。どのような状態にしろ、誰もがある点において自身より貧しい存在を見つけることが可能であり、同時に、その存在を思いやり助ける責任が生じているのだ。もし、空腹で過ごす義務がなければ、同情や援助といった課せられた責任を果たすことは自我にとって困難となったに違いない。義務である断食がなかったならば、同情からの課せられた責任を果たすことは到底不可能で、仮に試みたとしても中途半端なものにとどまる。それは、援助される側の状態を自我が感じていないためである。

第四の講話

自我の成長や自己鍛錬という点において、ラマダン月の断食が内包する多くの真理のうちの一つは以下の通り。

自我というものは、自身を誰からの制限も受けない自由な存在であるよう望み、また、そのように認識している。その上、自身がさも力を有する特別な存在であるかのように好き勝手に振る舞うことを本

質的に欲している。際限のない恩恵により生かされていることを省みない。特に、この世界で財産や権力があり、信仰から遠ざかっているとすれば、なおのこと、その権利がないにも関わらず、恩恵に好き勝手に手を出し、本能の赴くままそれらを飲み込む。

しかしながら、誉れあるラマダン月においては、最も裕福な者から最も貧しい者まで、すべての者の自我はこのように理解する。「私は支配者ではなく支配される存在である。自由の身ではなくしもべである。アッラーの許可がなければ、最も取るに足りない容易なことですらできない。水に手を伸ばすことすら。」自らに冠していた架空の神性は崩れ、しもべとしての自覚が生まれる。真の任務である感謝を忘れぬ存在となる。

第五の講話

自我にとり、その人格を正し暴走に歯止めとなる点において、ラマダン月の断食が内包する多くの真理のうちのひとつは以下の通り。

人間の自我は信仰から遠ざかることで自己を忘れさせる。自己の本質である、際限なき弱さ、終焉なき貧しさ、多くの欠点、これらがみえなくなり、みようともしない。実際には、非常に弱く、離別にとらわれ、災難がいつ起こるかと震え、いづれは朽果てばらばらになる肉と骨から成り立つ存在だということに気づかない。まるで体がステンレスでできていて死が彼に訪れることはなく、永遠の存在であるかのように妄想し、この世界に激しく執着する。貪欲さと強欲さ、執着心と情熱でこの世に没頭する。美味と感じるものや私利私欲に都合のいいものに依存する。そして完璧な慈悲で自身を育む創造主を忘れ、人生の目的や来世も考えず、悪い人格のまま転がり落ちる。

誉れあるラマダン月の断食は、最も無責任で頑固な者をも、自己の弱さや欠点や貧しさに気付かせるきっかけとなる。空腹になることで胃袋の存在を思い出させ、胃が必要とするものを理解させる。弱い体がどの程度病んでいるのかに気付かせる。どの程度、慈悲や慈愛を必要としているかを思い知らせる。そして、自我の中のファラオを手放し、絶対的な弱さと貧しさで神の庇護のもとに避難することを一心に望み、魂の感謝とともに慈悲の扉を叩く準備をする。但し、それは信仰から遠ざかることで心が病んでいなければの話であるが。

第六の講話

際限なき真理が説かれ人類を益するクルアンが啓示されるに最も相応しい月であるという点において、ラマダン月の断食が内包する多くの真理のうちのひとつは以下の通りである。

承知の通り、聖なるクルアンはこの誉れあるラマダン月に啓示されている。その聖なるクルアンの啓示を待つかのように、その天上からの知らせを謹んで迎えるために、ラマダン月に自我の低次の欲求や価値のない行為から遠ざかり、飲食をしないことで天使に近い状態となり、クルアンが今しがた啓示されたかのように、よみ、聴くことが可能となる。さらに、アッラーの最も名誉ある重要な使徒である預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）から聴いているかのように、あるいは、大天使聖ガブリエルから、あるいは、永遠の言葉を操る御方、その話し方が他の誰にも似ていない御方から直接聴いているかのように意識することで、魂がさらに神聖な状態に達する。また、自身が仲介人となり他者に聞かせることで、クルアンの啓示における真理が、ある程度体現される結果となっている。

まさに、誉れあるラマダン月においてイスラム世界はまるでひとつのマスジド（礼拝所）のようにになる。それは壮大なマスジドであり、何百万ものハーフィズ（クルアン暗唱者）たちが、その壮大なマスジドの片隅で、そのクルアンを、その天上の言葉を、地上の生きとし生けるものに聴かせている。

いつのラマダンも、شَهْرُ رَمَضَانَ الَّذِى أُنْزِلَ فِيهِ الْقُرْاٰنُ【ラマダン月はクルアンが下された月。（アルバカラ章2:185）】 という一節を光り輝くかたちで示し、ラマダン月がクルアンの月であることを証言する。その大きな共同体のある者は謹んでハーフィズたちに耳を傾け、ある者は、自らもクルアンをよむ。

このような神聖なマスジドにおいて、自我の低次の欲求にかまけて飲食し、その光り輝く場から出ていくことは醜い行為であり、そのマスジドの共同体の魂の嫌悪に価する存在となる。同様にラマダン月に断食をする者に敵対する者たちも、同じようにすべてのイスラム世界の魂の嫌悪や侮辱に価する存在となる。

第七の講話

この世に畑を耕し交易をする目的のためにやって来た人類への来世の報奨という点において、ラマダン月の断食が内包する多くの真理のうちのひとつは以下の通りである。

誉れあるラマダン月の善行への報奨は千倍である。真理のクルアンの一文字につき十倍の報奨があり（Tirmizi, Fezailul-Kuran, 16; Mecmeuz- Zevaid, 7:163）、十の善行と数えられ、十の楽園の果実となる、とハディースに記されている。

誉れあるラマダン月においては、一文字につき、十ではなく千の報奨となる。また、Ayatul-Kursi（アルバカラ章2:255節）のような節においては、その一文字につき報奨は何千もになる。誉れあるラマダン月の金曜日にはさらに多くの報奨がある（Deylemi, Musnedul-Firdevs, 3:130）。さらにみいつの夜（クルアンが初めて啓示された夜）には三万もの善行として数えられるのだ（アルQADR章97:3）。

このように、三万もの永遠の果実となる真理のクルアンは、楽園における光り輝くトゥーバの木を意味し、誉れあるラマダン月に何百万もの永遠の果実を信仰する者に獲得させる。さあ、こちらに来なさい。この神聖で永遠の利益をもたらす交易をみよ。よく観察し考えよ。この一文字の価値を重んじない者は、いかなる損害を被るかを理解せよ。

まさに、誉れあるラマダン月は来世への交易のため、非常に利益のある展示会場であり、市場である。そして来世の報奨の基盤である。すべての善行は、種子が芽を出し成長するために必要な四月の雨のようである。神性が宿る宇宙というアッラーの帝国において、人類の崇拝行為としもべとしての自覚に繋がる橋渡し役として、断食は光り輝く神聖な祭日の意味合いを持つ。そしてこのためにこそ、飲食のような自我の肉体的欲求や意味のない欲望に振り回されないために、断食が用意されている。一時的に動物的な状態から抜け出し天使的な状態に、あるいは来世のための交易に従事する状態に入ることで、一時的ではあるにせよ、現世的な欲求を手放し、来世に生きる者として、屍に魂が付随している（魂が肉体を管理する）状態になることで、断食は、かれ以外はかれを必要とし御自身は自存なされる偉大なる御方を、映し出す鏡ともなっている。

つまり、誉れあるラマダン月はこの仮の世界の短い生涯において、永遠の生命と永遠に続く来世の生活を内包し、それを獲得することに繋がっている。たった一度のラマダン月に80年の生涯の果実と同程度の報奨を得ることが可能である。というのも、クルアンでは、みいつの夜に関して千月以上の価値があるとされており、その秘められた価値を証言している。

たとえばある一国の王が、おそらく統治期間に毎年恒例の在位の記念日や、あるいは壮麗な建国の発端となった日々を祝日とするように。その日、一般的な法を越えて、個別の恩恵、幕無しの面会、特別なお言葉、最高のもてなしを準備され、さらに相応しく従順な民には自ら特別な寵愛を示すように。はじめもなく終わりもない偉大な御方、一万八千種の創造主であるアッラーが、その一万八千種に対し、真理を含む有益なクルアンを誉れあるラマダン月に啓示されている。このラマダンはアッラーの特別な祝日、珠玉の展覧会であり、魂が一堂に会する場であり、当然ながら、アッラーの真理はこれらを必要とする。

ラマダン月がアッラーの祝日であるからには、ある程度の肉体的要素を人間から遠ざけるために断食を命じられることは妥当である。そしてその断食を完璧なものに近づけるには、胃のようなすべての感覚器官や、眼、耳、心、想像、思考のような人に特有の装備にも断食をさせることである。つまり、禁じられていることから、意味のないことから手を引き、それぞれがしもべとして自覚する。例えば、舌を嘘や誰かをおとしめるような醜い噂話から遠ざけ断食をさせる。そして、舌を、クルアンの読誦や、アッラーの御名やかれを想起する言葉の唱念、預言者ムハンマドへの祝福祈願、罪を悔い改めアッラーの許しを請うことなどに使う。また、目を婚姻が許された存在以外か

ら、耳を悪い影響を及ぼすものから回避し、目を学びのために、耳を正しい言葉やクルアンを聴くために用いる。こうすることにより、その他の器官もある意味断食させることになる。胃は最も大きな工場であるため、断食によりそれを休ませると、その他の小さな内蔵も後に従い休まることとなる。

第八の講話

個人の人生における営みという点において、ラマダン月が内包する多くの真理のうちの一つは以下の通りである。

断食は、人間にとって最も効用のある精神的肉体的な療法である。そして医学的にも一療法である。人間の自我が飲食に関して好き勝手に振舞えば、人生の物質的肉体的側面において害を与えることはもちろんのこと、ハラール（許されたもの）、ハラーム（禁じられたもの）を気に留めず手当たり次第に飲食することにより、人生の精神的側面をを害することにもなる。そして心と魂がアッラーに従うことは、自我にとり一層困難となる。まるで手綱を手に負えない存在に乗っ取られたかのように。そうとなれば人は自我を操れず、自我が人を操ることになる。誉れあるラマダン月において、人は断食により一種の療法に慣れ、精神的な平安を得て、神の命令に従うことを理解する。普段は手だてのない繊細な胃も、消化が完了する以前に飲食をしないことで病から遠ざかる。そしてアッラーの命令であるハラールを遵守することで、ハラームから身を守るための知性とイスラム法を遵守する能力が向上する。つまり人生の精神的側面を害することへ阻止する結果となる。

人は生きる過程で往々にして空腹を味わう。忍耐と我慢強さを培う空腹は正しい道を生きるために必要である。誉れあるラマダン月

における断食は15時間、サフル（断食開始前の夜明け前の食事）なしでは、24時間の空腹で、忍耐と我慢、そして一過性のこの世から自我を遠ざけ感謝とともにいきることを学び、自己を鍛錬する。つまり、人の災難を何倍にもする忍耐力や辛抱の欠如に対する薬のひとつは断食である。

また、人の胃という工場には多くの従事するものが存在する。また、それらと関連する人間に備わる多くの器官が存在する。自我がもし、月が一時的に隠れる日なかに、休暇に出なければ、その工場に従事するものたちや関連する器官に崇拝行為を忘れさせ、自我のいうままに仕事をさせられ、抑圧の下に置かれることになる。その上、その他の器官までもがその精神的歯車のきしみや故障からバランスを崩してしまう。注意を常に自己に向けてしまう結果となる。それは、与えられた崇高な任務を一時的であるにしろ忘却することにつながる。そのために、昔から多くの聖者たちは自身の向上のため、正しく生きるために学び、崇拝行為に心を傾け、少量の飲食に自らを慣れさせてきた。

誉れあるラマダン月の断食により、その工場に従事するものたちが理解することは、彼らが単にその工場のためだけに創造されたのではないということである。また、その他の器官もその工場の取るに足りない楽しみに取って代わり、天使的、精神的な充足感を感じ、それに気付くことになる。そのために、誉れあるラマダン月において信仰者は個々の次元に応じて、それぞれアッラーから贈られるひかりや、精神的糧や、精神的喜びを得る。心と魂、知性、閃きなどの意識や自己認識がこの祝福されたひと月の断食により、進歩向上し、恩恵を蒙る。胃が泣いているのとは対照的に、かれらは本来のあるべき姿、純真そのものに微笑んでいる。

第九の講話

誉れあるラマダン月の断食は、自我の空想上の神性を直に壊し自己の脆さをみせ、しもべであることを知らせるという点で、多くの真理を内包するが、そのうちの一つは以下の通りである。

自我は創造主を認識することを求めない、というのもファラオのように自己に神性を持たせることを求めるためだ。いかに苦しい目に遭遇しようともそれを容易には手放さない。唯一、空腹がその強情さを打ち砕く。つまり、誉れあるラマダン月の断食は直接的に自我の空想上の神性に一撃を与え破壊する。自己の弱さ、脆さ、貧しさに直面することで、しもべであることに気付かせる。

これについて、以下のハディースがある。

アッラーは自我に尋ねた。「われは何者か、そなたは何者か。」

自我は言った。「私は私で、あなたはあなたです。」

そこで罰として、地獄に放り込まれた。再度尋ねられたが、またしてもこう言った。「私は私、あなたはあなた。」どのような罰が与えられても高慢な自我は諦めることを知らない。

最後に空腹という罰を与えられた。つまり、空腹の状態で放っておかれた。そして再度尋ねられた。「われは何者か。そなたは何者か。」

自我はついに言った。اَنْتَ رَبِّىَ الرَّحِيمُ وَ اَنَا عَبْدُكَ الْعَاجِزُ「あなたは私の慈悲深き創造主アッラーです。私はあなたの弱きいちしもべです。」と。（El-Havbevi: Durretul-Vaizin p.11）

اَللّٰهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلٰى سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ صَلٰوةً تَكُونُ لَكَ رِضَآءً وَلِحَقِّهٖ اَدَآءً
بِعَدَدِ ثَوَابِ قِرَآئَةِ حُرُوفِ الْقُرْاٰنِ فِى شَهْرِ رَمَضَانَ وَعَلٰى اٰلِهٖ وَصَحْبِهٖ وَسَلِّمْ

（我らがアッラーよ。預言者ムハンマド《彼に平安と祝福あれ》に、彼の家族、教友達に、その価値に適したあなたが望むご慈悲により、ラマダン月に読誦されるクルアンの文字の数ほどの祈りと平安がありますように。アーミン。）

سُبْحَانَ رَبِّكَ رَبِّ الْعِزَّةِ عَمَّا يَصِفُونَ ۞ وَسَلَامٌ عَلَى الْمُرْسَلِينَ
۞ وَالْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ۞ اٰمِينَ

（『あなたの主に讃美あれ、彼らが述べていることを超越する威厳の主に。使徒たちの上に平安あれ。アッラーに称賛あれ、諸世界の主に。』アッサーッファート章37／180-182節）

筆者からお詫び:

この二部は40分という速さで口述筆記され、私と速記した書記ともども病気であったため、内容に乱脈さや至らない点がみてとれるだろう。兄弟であるあなた方において寛容に読まれることを願っている。必要とあれば修正されたい。

*訳者: *TI @Feb2025*

“

誉れあるラマダン月の断食はイスラムの五つの義務のうち、最も重要なもののひとつである。また、イスラムを象徴する崇拝行為においても最も肝心なものである。

誉れあるラマダン月の断食には多くの真理がある。その存在が唯一無二であり名誉と栄光の主の絶対的支配という点において、人間の社会的営みという点において、個人的な営みという点において、自我の成長という点において、アッラーの恩恵に感謝するという点において、それぞれ真理を有する。

”

Bediuzzaman Said Nursi